

青酸カリ事件の思い出

槌田満文

永井荷風の小説「濃東綺譚」は、昭和十二年四月に私家版の単行本が作られたのち、四月十六日から六月十五日まで、東京・大阪の朝日新聞夕刊に三十五回にわたって連載された。盧溝橋で日中戦争（当時は支那事変、日支事変と呼ばれた）の火ぶたが切られる直前のことである。

そのころわが家であつてゐたのは朝日新聞と都新聞（現在の東京新聞）の二紙だったが、私はまだ小学校の五年生になつたばかりで「濃東綺譚」は記憶にない。題名からして何と読むかわからなかつたはずだし、読んでも内容が理解できたとはとても思えない。

私が初めて熱心に新聞小説を読みはじめたのは、火野葦平の「花と兵隊」からだつた。これは昭和十三年十二月から朝日の夕刊に連載されているから、「濃東綺譚」が載つたのは

その前年だつたわけである。

私が「濃東綺譚」を初めて読んだのは、終戦直後の昭和二十二年十二月に出た岩波文庫で、この第一刷には当時としては珍しい上質紙が使われていた。

終わりに近い第九章で、次の一節を読んだとき、ハツとしたことを今でも憶えている。麻布に住む独身の老作家大江が、向島の私娼窟玉の井で親しくなつたお雪を久しぶりにたずねて、氷白玉と一緒に食べるくだりで、突然「青酸加里」という昭和十二年当時の流行語が出てきたからだつた。

窓口を覗いた素見客が、「よう、姉さん、御馳走さま。」

「一つあげよう。口をおあき。」
「青酸加里か。命が惜しいや。」

「文無しもんなしのくせに、聞いてあきらめたらア。」

この会話の背景となつてゐるのは、小説が新聞に載る一年半前、昭和十年十一月に起きた青酸カリによる毒殺事件だつた。実は、殺害されたのは私が通学していた小学校の校長先生で、忘れようにも忘れられない事件だったのである。

当時の新聞を調べてみると、読売新聞の昭和十年十一月二十二日付け夕刊（当時の夕刊は翌日の日付けで、配達されたのは二十一日夕刻）は、事件を次のように報じてゐる。

「廿一日午前十時半ごろ浅草区向柳原町柳北尋常小学校々長増子菊善（四八）氏が、この日わたすべき教職員まねごと四十九名の俸給三千三百五十三円卅三銭を浅草区役所から受けとり風呂敷に包んで内ポケットにいれてもちながら

その足で同区雷門一ノ四交番前の明治製菓喫茶店にあらはれ、これよりさき左隅のテーブルで紅茶二杯を註文して同校長の来るのを待つてゐた廿七八歳ぐらゐ、身長五尺三寸、緋の着物に駒下駄をはいて黒のロイド眼鏡をかけた男の前へ腰をおろし前におかれた紅茶を二口三口のんだが同校長が『すこしにがい、色がへんだな』といふと男は『ぢやア、捨てさせませう』とボーイに命じてすてさせてから代りにコーヒーを註文したが、そのコーヒーを待つてゐる間、突然同校長は『うーむ！』と唸りながらその場に倒れた……』

犯人は介抱すると見せかけて校長の風呂敷包みを抜きとると、どきどきにまぎれて逃走したが、その日の夜おそくに逮捕された。東京朝日の二十二日付け朝刊には「犯人は当局が苦心捜査の結果、小学校関係の出入商人、浅草千束町二ノ二九五足袋店遠州屋主人鶴野洲武義（二七）と判明、同人が同夜十一時半千束町二丁目待合しのぶ方で遊興中を象潟署捜査本部に捕縛検査された。……」とある。

犯行の動機は遊蕩の結果金に困つたため、顔見知りの増子校長に恨みがあるわけではなかつた。使われた薬物については、「紅茶の受皿に残つてゐた滴汁を採つて警視庁鑑識課で

化学試験をした結果明かにその残汁に青酸加里の含有を認め」たという。

昆虫標本の作製などにも使われていた青酸カリは、薬局や文房具店で比較的容易に入手できる時代だつたから、その威力がわかるとたちまち青酸カリ自殺が流行した。翌年一月十日付けの読売新聞には「昨年十一月浅草の校長毒殺事件が起つて以来といふもの猫も杓子も『自殺は青酸加里……』といふことに相場がきまつてしまつた」とある。「青酸加里」は「溼東綺譚」に見られるような流行語にまなつたのである。

この事件のとき、私は柳北小学校の四年生で、朝礼では毎朝、やせぎすな増子校長の細ぶち眼鏡にチョビひげを生やした温容に接していた。穏やかな人柄は生徒たちにも慕われていたから、毒殺は想像もできない事件だつたのである。

その日は授業時間中に緊急の職員会議が開かれ、午後からの授業が休みになつた。ただならぬ気配が感じられたものの、生徒たちに理由は一切説明されななまだつたため、私は何も知らずに帰宅し、近所の原っぱでいつものように友だちと遊んでいた。夕方近くに鈴の音とともに号外が配られてきて、初めて

事件を知つたのである。

犯人はその日のうちにスピード検査された。夜おそくまで警察署に詰めていた先生がたは、逮捕の報を聞いてビールで乾杯したが、その写真が翌日の新聞にデカデカと出てしまつた。いくら犯人逮捕を喜んでにしても、乾杯はあまりに不謹慎ではないかと大問題になつたが、あのころの教育界の空気からすればそれも当然だつたかもしれない。しかし、校長亡きあとの責任者である副校長が、幸か不幸か長期病欠中だつたため、だれも責任を取らされないままに終つた。

新聞記者になつてからの私が、このことを思い出したとき、ハタと気づいたのは、新聞社のカメラマンが絵柄を考へて、先生がたに乾杯のポーズをとらせたにちがいないということだつた。取材の際にありがちなケースで、言われるままに従つた先生がたに罪はなかつたのではないかと思う。

身近な人物の死が号外ダネになり、連日新聞の紙面をにぎわしたことは、私にとつて生まれて初めてのショックを経験だつた。昭和という時代も終わつてしまつたいま、この事件を記憶している人はどのくらいいることだろうか。